沼津市明治史料館通信

二〇一四年一月

通巻116号

■シリーズ沼津兵学校とその人材94
高島流砲術家　小野金蔵

■江原素六とその周辺56
琉球王族の書額

■史料館からのお知らせ

御撰劍槍炮柔術名家鑑
（当館蔵）

シリーズ　沼津兵学校とその人材　94

高島流砲術家　小野金蔵

表紙に写真で掲げたのは、「御撰剣槍炮柔術名家鑑」という表題が付された一枚刷である。幕府が幕末に設立した講武所の役職者を一覧にしたものであり、掲載された人名等から判断して安政末年から文久二年頃までの間に発行されたと考えられる。上段には、剣術は男谷下総守（信友）、伊庭軍兵衛（秀俊）、槍術は高橋謙三郎（泥舟）、砲術は下曽根甲斐守（信敦・信之）、江川太郎左衛門（英敏）、高島四郎太夫（秋帆、高橋は誤り）ら、師範役として錚々たる人々が並ぶ。

しかし、ここで注目したいのは中段から下段にかけての砲術教授方の部分である。二人目に小野金蔵という名前がある。彼は後に沼津兵学校絵図方となった人物である。明治元年時点で五六歳だったので、兵学校の教授陣の中で最年長だったと考えられる。なお、同じ並びに「桂川主税」があるが、これは養家を継ぐ前の、後に沼津兵学校の管理者たる静岡藩少参事・軍事掛になった藤沢次謙のことである。

小野金蔵の履歴については、判明している限りのことをこれまでも紹介してきたことがあったが（拙著『沼津兵学校の研究』）、わずかながらでも新知見を加え今一度再確認しておきたい。

天保一二年（一八四一）四月、長崎から江戸にやって来た高島秋帆に入門した人物に小野金三郎なる幕臣がいた。奥医師小野桃仙院の三男であった。秋帆の門人としては、江川坦庵・下曽根信敦に次ぐ早い時期の入門者だった（梶輝行「高島流砲術の形成過程とその展開」『近世日本の海外情報』、一九九七年、岩田書院）。翌月秋帆が実施した徳丸原での演習にも参加し、点火者の役割を果たした。また、調練の際の下知の言葉の統一に関して、下曽根や小野らに宛てた坦庵の書簡が残っていることからも（『江川坦庵全集』）、幕府による西洋砲術の採用時に小さくない役割を担った当事者の一人だったといえる。小野金三郎は、保守派の陰謀によって秋帆が逮捕・処罰された後は下曽根門下に移り、修学を続けたらしい。

実は下曽根の門人の中には、金三郎とは別に金蔵という名前もあり、二人を別人とする研究書もある（坂本保富『幕末洋学教育史研究』、二〇〇四年、高知市民図書館）。しかし、同一の史料に二人がいっしょに登場することはないようであり、そうなると金三郎と金蔵は同一人物ではないだろうか。師である下曽根信敦の通称も金三郎であることから、遠慮して小野金三郎は金蔵と改名したのかもしれない。「小野金蔵様」宛の高島秋帆書簡も現存する（東京都立中央図書館蔵・渡辺刀水旧蔵諸家書簡）。

小野金蔵は、安政三年（一八五六）、後に沼津兵学校で同僚となる間宮信行（鉄太郎）らとともに、下曽根門下による駒場野での演習に教佐として参加している。講武所の砲術教授方出役に就任したのは、その後のことであろうか。文久元年・二年の武鑑には、十人扶持を給され芝二葉町（現在の新橋駅近く）に住んでいたことが記されている。なお、小野金三郎の実家である寄合医師小野西節の安政三年頃の住所も「芝二葉町井上俊良抱屋敷内借地住宅」だったので（『内閣文庫所蔵史籍叢刊　諸向地面取調書（二）』、六四八頁）、住まいの点からも金三郎・金蔵が同一人物である可能性が高い。

金蔵は、講武所が陸軍所と改称された後も勤続していたようで、「大砲の図面を製する役」だった。化学者宇都宮三郎は小野に指示して図面を描いてもらい、韮山では失敗を重ねた大砲鋳造を「王子の鋳造場」（滝野川反射炉）では成功させることができたと述べる（『宇都宮氏経歴談』）。慶応元年（一八六五）時点では歩兵差図役頭取勤方で「図引」担当、五三歳だったことが当時の原文書から判明している（横浜開港資料館蔵「歩兵組役々姓名」）。逆算すれば、徳丸原演習の時は二十代の青年だったことになる。

幕府瓦解後は、駿河移住を選択し陸軍御用取扱に任じられ、沼津兵学校では書籍掛を経て絵図方（年俸一〇〇両）となった。開成所画学局出身の川上冬崖らといっしょになったことになるが、小野が習得した製図の技能は、油絵・洋画のそれとは少し違ったであろう。兵学校教職員の住所を記載した「沼津城御囲内外御役宅人名帳」（東京大学史料編纂所蔵「幕臣井上家諸控　十三」所収）には、江原素六・阿部潜らと同じく氏名の下に「外」と記されているので、沼津城下ではなく武家屋敷地の区域外に居住していたものと推測される。

廃藩後、沼津兵学校が明治政府に移管され、沼津出張兵学寮と改称された段階で陸軍省十五等出仕、明治五年（一八七二）五月東京の陸軍兵学寮に合併・吸収され廃校となったのと同時に造兵司十五等出仕に転じた小野昌升とは、金蔵の改名後の名前ではないかと思われる。明治四年八月には兵部省への出仕が命じられていたが、眼病を理由に一旦は断っていた（国立公文書館蔵「公文類纂　明治四年　巻一三　本省公文黜陟部一〇」）。昌升は、八年（一八七五）三月には再び本省の十五等出仕に戻っているが（『近代史史料陸軍省日誌』第三巻）、九年以降の官員録にその名を見出すことはできない。すでに六〇歳を超えていたはずである。

維新後の静岡移住旧幕臣の名簿『駿藩各所分配姓名録』（明治二年刊）には、小島（現静岡市清水区）の割付となった一人として小野西節の名前が記載されている。金三郎の実父桃仙院の前名が西節であり、同家ではそれを襲名したのであろう。小島に移住した西節とは、金蔵の兄または甥だったのかもしれない。

高島流砲術による西洋軍制採用が日本の近代陸軍誕生の第一歩だったとすれば、小野金蔵という古参の砲術家は新旧の時代の結節点にある沼津兵学校にとって象徴的な存在である。しかし、墓所も子孫の存否もわかっていない。

（樋口雄彦）

江原素六とその周辺 56
琉球王族の書額

当館が所蔵する江原素六の遺品の一つに、「花本」と記された書の扁額がある。「嘉永三年庚戌」「中山尚慎」という文字も記され、四角の朱印が二つ押されている。当館に寄贈される前、江原家資料が江原素六先生顕彰会によって管理されていた当時から、この尚慎とは琉球国王であると語り継がれていたので、たぶん江原家にそのような伝聞が残されていたのであろう。なお、「中山」とは、もともと北山・南山とともに琉球の三勢力圏の一つであったが、尚氏が中国皇帝から琉球国中山王に冊封されたことから、琉球そのものを意味した。

しかし、尚慎（一八二六～六二）は正確には琉球国王ではなく、王族である。彼は、第一七代国王尚灝王（一七八七～一八三四）の第六子であり、第一八代国王尚育王（一八一三～四七）の弟にあたる。王族出身の領主（徳川将軍家にたとえれば親藩のような存在）、玉川御殿の第一三代目・仲里按司朝慶の養子となり、第一四代として玉川王子朝達と称した。

琉球王国は、江戸時代初期に薩摩藩島津家によって武力侵攻されたため、江戸幕府に服属していた半面、外面上は独立国としての体裁をとり、清国にも朝貢していた。将軍の代替わりに際しては慶賀使、自国の国王の代替わりにあたっては謝恩使を江戸に派遣し、幕府に対する礼節を守った。尚慎は、甥である尚泰王が第一九代国王になった際の謝恩使の正使に選ばれ、嘉永三年（一八五〇）二五歳の時、一〇〇名近い使節団を率い江戸を訪れている。六月二日琉球を出発、経由地である鹿児島を八月二一日に出発、江戸に着いたのは一〇月三〇日だった。一一月一九日には薩摩藩主島津斉興・その世子斉彬に伴われ登城し、一二代将軍家慶に拝謁した。国王からの献上品のほか、島芭蕉布・泡盛酒など尚慎自身も献上品を差し出している。二二日にも登城し、随行の伶人たちによる音楽を披露した。将軍からは国王宛に白銀五〇〇枚などが下賜されたほか、尚慎にも銀二〇〇枚・時服一〇が下された。一二月一二日江戸出立、翌年二月一七日鹿児島着、琉球に帰り着いたのは四月一三日のことだった。この謝恩使が、寛永一一年（一六三四）以来全一八回に及んだ琉球使節の、江戸時代最後のものとなった。

尚慎は、島津斉彬と連携して琉球の改革に取り組もうとしたが、斉彬急死後の保守派による政変（一八五九年の牧志・恩河事件）に際し、国王廃位を企てたという謀叛の嫌疑をかけられ、領地（現糸満市）に蟄居させられ、失意のうちに亡くなった。尚慎の跡を継いだ同家一五代朝常の時に廃藩置県（沖縄では一八七九年）を迎えたが、王家が侯爵、同じ尚育王の弟である尚健（伊江王子）が男爵（伊江家）となったのに対し、尚慎の子孫のその後については不明である。

江原家伝来の尚慎の書額は、清国の年号ではなく嘉永三年とあることから、謝恩使での江戸行きの際、江戸か道中において揮毫されたものではないかと考えられる。ただし、当時、素六は一〇歳に満たない子どもであり、またその父は無役の小普請にすぎず、江原家が琉球使節に直接関係したはずはない。たぶん、素六が後年、誰かから譲られたものであろう。

尚慎は書をよくしたことで知られ、沖縄県立博物館にも「梅花」（王安石五言絶句）、「苑仲遇雪応制」といった掛軸や「福寿録」の板額などが所蔵されている。

中山尚慎書「花本」扁額
（当館蔵）

〈参考文献〉『新訂増補国史大系49　続徳川実紀　第二篇』（一九六六年、吉川弘文館）、横山學『琉球国使節渡来の研究』（一九八七年、吉川弘文館）、『沖縄県姓氏家系大辞典』（一九九二年、角川書店）、『琉球王国―大交易時代とグスク―』（一九九二年、沖縄県立博物館）、比嘉朝進『最後の琉球王国』（二〇〇〇年、閣文社）、『沖縄県史　各論編4　近世』（二〇〇五年）、与並岳生『新琉球王統史』18・19（二〇〇六年、新星出版株式会社）、沖縄県立博物館データベース

（樋口雄彦）

史料館からのお知らせ

企画展ギャラリートーク

現在、３階北側展示室では企画展「新収資料の公開」が開催中です。

２月23日㈰までの期間中、当館学芸員によるギャラリートークが全３回あり、３回目が２月８日㈯に予定されています。

観覧料はかかりますが参加は無料です。

１月のギャラリートークの様子▶

『近代沼津人物列伝』刊行

平成25年度の第１回企画展として昨夏に開催した「近代沼津人物列伝」ですが、このたび記録集として１冊にまとめました。当館にて１冊500円で頒布中です。

第２回企画展「新収資料の公開」に合わせて４階展示室でリバイバル展示も開催しています。

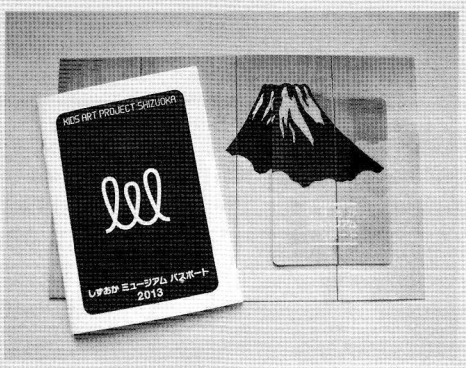
ぜひお求めください。

キッズアートプロジェクトしずおか ミュージアムパスポート

当館は「キッズアートプロジェクトしずおか」に参加しています。

昨春、静岡県内の全小学生に配布されたミュージアムパスポート。これを持って入館すると、県内の参加館の観覧は無料、さらに入館の際に押すスタンプを集めると、景品がもらえる特典付きです。博物館、史料館に出かける時は持って出かけましょう。

参加館についてはパスポートをご覧ください。



今年度もたくさんの小中学生が見学に来てくれました

今年度も江原素六や昔の道具についての学習などをするために来館してくれました。
ありがとうございました。

４月24日	市立高中等部	80名	６月12日	金岡小４年生	158名
９月11日	金岡小３年生	153名	10月17日	麻布中学	300名
10月29日	門池小４年生	120名	11月１日	第一小４年生	35名
11月13日	開北小４年生	68名	11月20日	大岡小３年生	74名
12月10日	第五小４年生	83名			

（平成25年12月末現在）

沼津市明治史料館通信
第116号
平成26年1月25日
編集・発行　沼津市明治史料館
〒410－0051 沼津市西熊堂372－1
TEL055－923－3335
FAX055－925－3018
印　刷
みどり美術印刷株式会社

おかげさまで開館30周年！

平成26年10月で明治史料館は開館30年を迎えます。30周年記念企画展として、沼津兵学校についての展示なども予定しています。

どうぞご期待ください。

平成26年度そろくまつり 江原素六学習作品展について

来年度も５月18日㈰にそろくまつりを開催します。また、それにあわせて近隣の小学生たちが総合学習として学んだ江原素六についての作品も展示します。展示期間は４月中旬からを予定しています。そろくまつりの日はどなたでも観覧無料！

ぜひご来館ください。